

幽靈講座

南海部

覺悟

窓の外は、深い闇の中を、しんと暗い雪が降り続いていた。

厚い遮光カーテンを挟んで、暖房された講義ホールの内気も、次第に温もりを失いつつあった。



「空間と時間、合わせて時空と呼びますが・・・皆さんは、それらの本質について、考えたことはありますか？」

スキンヘッドに、もみあげを蓄えた初老の講師が、頭上の虚空を見上げながら学生たちに尋ねた。

広いホールの静寂を破って、回答する者は誰もいなかった。

「時空は、“時空” という粒子の集合体なのです。粒子とは、物や現象の最小単位のことです。時間や空間には、それ以上分割できない最小単位があります。プランク時間・プランク空間とも言いますが、コンピュータで文字や画像を構成する“ドット”と同じで、それには内部に構造がありません。内部構造が無い代わりに、“真空のエネルギー”を内包しています。今話題の“ダークエネルギー”の正体だとも言われています。真空のエネルギーを内包した粒子を、“素粒子”と呼んでいます。素粒子には、“物質を構成する素粒子”と、“力を伝達する素粒子”が存在すると言われています。」

「時空は、この素粒子によって、ぎっしりと充填されたものです。言い換えれば、素粒子の集合そのものが、時空なのです。ところで、ぎっしりと充填されているにも拘らず、時空には素粒子の密度の差があります。」

「素粒子の密度の差、それは即ち真空のエネルギーの密度の差です。ミクロの眼で見れば、何もない真空の空間も、私たちの体も、更に巨大な地球そのものも、真空のエネルギーの密度に僅かな差があるだけの、同じような空間に過ぎないのです。」

「先ほど、物質を構成する素粒子、力を伝達する素粒子が存在すると言いましたが、私

はそれ以外に、“意識の振舞を司る素粒子” が在るのではないかと、常々思っています。」

「私の専門は脳科学ですが・・・脳を研究すればするほど、意識の振舞をを司る素粒子への想いが強くなります。というのは、脳を構成する神経細胞、これはタンパク質や核酸・脂質などの有機物（物質）です。そして、軸索を流れ情報を伝える微小電流、これは電磁気力（力）です。それら（物質と力）を使い、目的を持ち、情報を集め、統合して判断し、行動する精神作用が意識です。つまり脳や体という物質、それらを稼働し維持する生命の力、そういったものとは全く別の存在が、意識だと思っています。」

教室の空気が、ざわつき始めました。

後方から中年の男性の声で質疑が上がります。

「じゃ先生は、人の意識と体が別体だということですか？人が死んだら意識はどうなるんでしょうか？」

「先ほど、素粒子の密度の差の話をしました。私は若くて正常な人間は、三つの素粒子の密度のピークが、同じ座標で折り重なり、安定した状態にあると考えています。人間、齢を取って衰えてくると、この（物質と力）の二つのピークの標高が下がり、ピークの座標も少しずつずれてきます。更に加齢が深まると、二つのピークは周囲と同じ基底状態となり、意識のピークだけが残り、死に至ります。」

「つまり、意識を司る素粒子の、真空のエネルギーだけが残されるってことですか？死んだ人の意識が、廻りの空間に充満しているってことですか？」

「――その通りです。」

ホールの空気が騒然となった。

「皆さんは、ご自身が産まれて数か月の記憶は、殆ど無いか、あるいは非常に希薄だと思います、どうしてでしょうか？」

左手前方の、若い女性が手を挙げて答えた。

「それは、赤ちゃんの感覚器官が未熟だからじゃないですか？眼はまだよく見えなくて、聴覚や嗅覚だって……。」

「感覚器官が未熟だからじゃなくて、入ってくる情報を統合できないからです。乳児期の記憶も、断片的なものであれば、非常に鮮明である事例が、臨床的に報告されています。」

「乳児期以降に、脳の中で意識が生まれるってことですか？」今度はホールの中央辺りの席から、野太い男の声が上がった。

「生まれるんじゃないくて、周囲の空間に充満する意識の素粒子を取り込むと考えた方が、自然です。」

場内が、再び騒然となる。

「じゃ、私たち自身のこの意識も、かつて存在した他人の意識だっていうんでしょうか？」

「——その通りです。」

「ち、ちょっと待ってください。だったら私の意識に、前世の記憶が全くないのはどうしてなんですか？過去の他人の意識なら、記憶の片鱗でも在りそうなもんじゃないですか？」



騒然となって沸騰したホールを落ち着かせるように、広げた両手をゆっくりと上下に動かしながら、長い間合いの後、スキンヘッドの講師が答える。

「前世の記憶が無いのは、意識だけでは記憶を維持できないからです。記憶は主に脳内の電気信号と、神経伝達物質によって維持されます。つまり（物質）と（力）の素粒子の関与が必要なのです。」

すぐ後ろの列の長身の学生が、呆れ顔で立ち上がった。

「先生が我国の脳科学の権威で、これが貴重な講座だからと思って、みんな素直に訊いているんですが、話の内容が俄かに信じられません。つまり先生が仰りたいのは、意識とは、ネット空間に満ち溢れているアプリケーションソフトのようなもので、そこに人体というノートパソコンのようなハードウェアが接続・起動されると、自動的にダウンロード、インストール、セットアップされて精神活動が始まる、という事でしょうか？」

「アプリケーションソフトというのは、多少ニュアンスが違います。あえて言うならOS（オペレーションシステム）が正解でしょう。」

唐突にスマホが振動して、同じ学部の友人からLINEの着信があった、ホールの何処かに居て、同じ講座を訊いてるはずだ。

〈スキンヘッド、何言ってるか分かるか？〉

〈突拍子もない話で、まるで宗教だ。〉

〈訊いてる連中も、見たことない顔ばかりなんだが……。〉

〈公開講座だって言ってたから、学外からギャラリーが集まっている。〉

〈くだらんから、帰るか？〉

〈最後まで訊いてレポート出せば4単位だ、俺は残る。〉

〈もう外は真っ暗だぞ、夜間講座なのかこれは？〉

〈徹夜で教えるって訳でもないだろ、今話が佳境だから、少し黙って訊いてろ！〉

この講義ホールに入るのは、初めてだった。

正面の巨大な黒板と、教壇を中心として、すり鉢状に席が並んでいる。

椅子は例によって後ろの机に跳ね上げ固定式で、窮屈なことこの上ない。

空調の不具合か、内気が益々冷えて、吐く息が白くなってきた。

ずっと後ろの方から、今度は中年の女性の声が上がった。

「先生は先ほど、“記憶は主に脳内の……” と仰いました、ひょっとすると脳以外にも、物事を記憶する器官が在るのでしょうか？」

「いい洞察です！多くの臓器や、筋肉のような組織にも、多少なりとも記憶を留め置く機能があるようです。臓器移植された患者（レシピエント）が臓器提供者（ドナー）の過去の記憶を不完全ながら獲得した臨床報告は、いくらでもあります。」

「皆さんは、どうやら意識と記憶に関して、拘っておられるようです。それでは記憶の軸である“時間”について考察してみましょう。言うまでもありませんが、時間には過去・現在・未来の三つの状態があります。現在を“確定”と表現しますと、未来は“未確定”つまり確定していないので、様々な可能性の分岐が存在します。ところで、確定した現在から見ますと、過去も未来と全く同じで、全てが未確定の状態なのです。」

周囲から“エ～”といった声が挙がった。

「過去に関して、未確定とするのはおかしな表現ですので、ここでは“不明”としておきましょう。つまり、未来は未来の方向に向かって未確定の分岐が無数に存在し、過去も過去の方角に向かって不明の分岐が無数に存在します。重要なのは、過去も未来も“現在”の一点に向かって、分岐が少しずつ収斂していることです。可能性の分岐が全て収斂するのは、今のこの瞬間だけなのです。」

「量子力学のコペンハーゲン解釈を流用して表現すれば、過去と未来は、状態が“重ね合わせ”であり、現在は状態が“収縮”していることになります。何れにせよこの解釈によって、時間がどちらに進もうとも、現在を中心として対称であり、論理に破綻が生じません。」

「話が破綻しています！」「出鱈目言わないでください！」

講師が喋り終らないうちに、何人かが立ち上がって口々に叫び始めた。

「未来に関しては、それで良しとしても、過去は確実に確定された事実でのみ、構成されるのではないですか！過去ってそういうもんでしょ？」

「過去の事実が不明だなんて、とても信じられません。ここに居る誰だって過去の確実な記憶を持っていますし、デジタル・アナログを問わず、世の中には膨大な過去の記録があります、それらの記憶や記録もすべて不明・不確定だって言うんですか？」

列の端の男性の受講者が、呆れた顔をして立ち上がり、持ち物を仕舞ってホールから退出していった。

五月雨式に何人かがそれに倣った。

彼らを見送りながら、スキンヘッドのもみあげがゆっくりと答えた。

「皆さんの記憶も、書物や電子機器の記録も、今この瞬間の事実を、今この瞬間に再生して見ているんです。過去に確定した事実を、再生して見ているわけじゃありません。つまり記憶や記録自体、重ね合わせ（未確定）の状態で収録し、今この瞬間、収縮（

確定)して事実として再生するんです。事実が存在するのは、今この瞬間だけで、現在の事実を合理的に説明できる無数の可能性が重なり合い、同居している状態が、過去や未来なのです。」

「じゃ私たちの過去は、今の現実を実現し得る全ての可能性が、重なり合い同居していると仰るのですか？」

「言葉の厳密性に留意すれば、“重なり合い同居していた”ということです。」

至る所から非難の怒号が上がり、講義ホールはまたまた騒然となった。

やがて、興奮の後の気恥ずかしさの為か、穏やかな静寂が辺りを包み込む。

諦めの空気と共に受講者の大半が立ち上がった、大きな流れとなってホールの出口に向かう。

5分後にはLINEで話した同じ学部の友人と、建物の玄関へと向かっていた。

「悪い！講義ホールに傘忘れた・・・取ってくる。」

引き返した友人と入れ替わりに、スキンヘッドもみあげの講師が、暖かそうなコート姿で歩いてきた。

こっちの顔を見るなり、「どうでした？今日の私の講座。」

口籠もっていると、「何時ものことですが、呆れて帰っちゃう人が多かったですねえ、正常な人間だと、ちゃんと最後まで訊いてくれるんですが・・・こっちは、全て真実話してるのにねえ。」

そういいながら暗い雪のキャンパスに消えて行った。

友人が大声でこっちに駆けてきた。

顔面が蒼白である。

「どうした？何かあったのか？」

「さっきの講義ホール、いったい何処にあるんだ・・・いくら探しても見つからん！」

「4階だろ？」

「4階は屋上だ、ここは3階までしかないぞ！」

大慌てで外に出てみた、オレンジ色のナトリウムランプが玄関の先を照らしている。

新雪が降り積もったキャンパスに、一切の足跡も、車の轍も、人の気配もなかった。



翌日の早朝である、キャンパスの警備員がペントハウスのドアを開錠し、屋上に出て肝を潰した。

白銀の雪に覆われたその場所は、一面に無数の足跡で踏み荒らされていた。そして、一本の傘が打ち捨てられていたのである。

おわり。

全てフィクションであり、登場する人物・団体とも実在しません。

幽霊講座

<http://p.booklog.jp/book/113056>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113056>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト